

行脚を通して伝わる
「神仏の慈悲」⑫：

人生は何が起こるか分からない。

『好事魔多し』と言うように、良いと思える事の裏には、それと同じくらい、いやそれ以上の魔も潜んでいるという戒めを含んだ言葉です。

あるいは『災い転じて福となす』

という様に、目の前の災い自体に目を奪われるのではなく、それは福の種を宿しているのだと、将来的展望をもつて捉えるべき言葉もあります。いずれにしても、私達の《心》の持ちようが鍵を握ります。

心の柱を具えているか否かは、《志》を持つているか否かによります。志があれば、日常生活の1つ1つを、誠心誠意に打ち込んで生きる事ができます。志の無い人は、残念ながら、一つ物事に気持ちを込める事は困難になるでしょう。

つまり、私達が生きる上で《志》を持つ事の必要性がここにあるのです。成功する人と、成功しない人との差も、《志》を持っているか、持っていないか、あるいは志の大小に

よって決まってくるといえるでしょう。

私達は、揺るぎない自分の《心》の柱を建てる為に、大きな《志》を持ち、コツコツと自分に課せられた日々の精進に努めねばなりません。そこに、先に挙げたような格言のように、一喜一憂する自分の浅い心を一蹴(いっしゅう)することが出来るのではないのでしょうか。

そもそも「災い」や「幸福」などは、何をもつて「災い」になり、なにをもつて「幸福」とみるのでしょうか？「災い」や「幸福」の定義なんてあるのでしょうか？そんな定義は、この世の中には存在しません。「不幸」は自分の心が決めるものですよね。そんな事は分かっているのに、私達には「欲」があるから、忘れてしまうのです。常に人と比較をして、「ああでもない、こうでもない」と一喜一憂するのが私達の心です。繰り返しますが、だからこそ一喜一憂しない《心の柱》を建てなければいけないのです。《志》：その《志》は《信仰心》とも言い換えられます。自分の信じた一道を行くのです。何があっても、比較してはいけません。

野に咲く一輪の花、あるいは雑草も同じ事、隣に綺麗な花が咲き誇っているようにも妬まないし、それでいて自分の姿を変えませんが、ただひたすら自分の花を咲かせる様に努めています。私達も今ある環境の中で、《信仰心》を持って、1にも2にも周りと比べず努力精進しなければ、心にスキができ、せつかくの福が災いに転じてしまう結果を招くことになるでしょう。《信仰心》を持つ事の大切さを今一度自覚いたしましょう。

(前号までの続き)

さて、ここからは前号までの続きを記したいと思います。

京都は、世界遺産にも認定されている『醍醐寺(だいがじ)』に詣でました。この日は年に1度の『五大力尊仁王会』の大祭の日です。『醍醐寺』に到着した時、境内の真ん中では、ちょうど「餅(もち) 上げ力奉納(力供養) : 巨大なお餅を抱え、何分何秒抱えていられるかを競う」が行われていました。京都駅には「餅上げ力奉納」に使用される大鏡餅(紅白)が展示されているので、一見の価値あります。因みに展示されている紅白の大鏡餅は、

男性競技用のもので、重さはなんと150kgもあるそうで、大きさは紅色が直径50センチ、白色が80センチ(なお、女性競技用は重さ90kg)だそうです。「餅上げ力奉納」では、この鏡餅を持ち上げ続ける時間を競うのですが：自信のある方は、ぜひ富山県代表で参加してみても如何でしょうか(笑)？

昨年の大会には、何人挑戦したのか詳しくは知らないが、数十人挑戦していた事は間違いないと思います。その中で私が観戦しはじめた時の挑戦者は女性でした。そして、結果的にその女性が、歴代最高記録をたたき出すパフォーマンスをやった瞬間を目の当たりにする事ができたのです。その結果を知ったのは、夜の地元ニュースでのことでした。「アツ：この女性は、ちょうど観戦していた時の、あの時の人じゃん！」正直驚いた。

これは何となく小さな事ですが、何かこういう節目というか、タイミングで必ず居合わせさせて頂ける事に、実は、「幸福」を感じました。私はたまたま「居合わせた」のではなく、「居合わせてもらっている」とい

う事なのだと思います。

高野山での『五坊寂靜院』の時もそうだが、「たまたまの偶然」として、私が受け止めていたのなら、その後の行脚も平凡な体験にしかならなかったのではないかとさえ思います。そんな事に段々気付く自分になってきた時に、常日頃から導いて下さっている神仏様のお計らいに、感謝の念を改めて強くするのです。

「下醍醐」を参拝して廻り、次は「上醍醐」への登山をスタートさせました。「上醍醐」への入山は、普段は入山料を納めなければならないが、この大祭中に限り、無料入山できるので、お勧めですよ。

「上醍醐」への登山は汗ビッシュヨリになりながら、行き交う方々と「ご苦労様です。行ってらっしゃい。もう少しですよ。頑張りましょう」等々…。暖かい言葉が飛び交う、気持ちの良い登詣だった。

行き交う人同士は、勾配のキツイ信仰のお山を、お互いにそれぞれ信仰の気持ちで登山しているので、心も素直に清浄になっていくのでしょね。街や境内ではなかなか交わす

ことのない労いの言葉や、励ましの言葉を、誰彼構わず掛け合っているのですから。見ず知らずの人達と言葉を交わす事は、日常生活の中にあつては、珍しい。これほど新鮮で、有り難い気持ちになれるのは登詣の魅力。身延山の七面山登詣の際も同じ光景に触れることがある。そもそも、そのこと自体に、信仰の御利益が現れているのかも知れませんね。

何はともあれ、「上醍醐」登詣により、『醍醐寺』の神聖な空気を感じる事が出来た。

「上醍醐」からの下山は、時間が足りないのもあつて、まさに飛ぶ様にして下りてきた。

もちろん信仰のお山です。騒がしい下山は神仏様が嫌います。《志》が曲がってしまったてはいけません。登詣した時と同じ様に、途中で登詣者と挨拶を交わしたり、励まし合ったりと、感謝しながらの下山を心掛けました。

これは笑い話なのですが、飛ぶ様に下山する私の姿を見て、周りの登詣者は「わあー！」と歓声を上げていました。私には天狗さんの羽根が付いているかの様な、自分でそんな感じがしました。頂上から境内まで13分といっ

たところだ。もし、オリンピック競技に、『下山大会』があれば、私は日本代表選手に選考されるのかも知れない(笑)と、くだらない事も頭をよぎっていました。

そんな「上醍醐」から下山して「下醍醐」の各お堂を参拝したのだが、「上醍醐」を登詣する前と、全然違う景色に映っていた。やはり世界遺産に登録されるだけあつて、土地の持つ力は大きく有り難いことを実感した。

(来月号へ続く)

副住職 谷川寛敬
合掌



「鯉のぼり」のおはなしです

◆わが家に男児が誕生したと天の神に告げ、「この子を守ってやって下さい」と守護を願って目印にしたものが鯉のぼりです。

・「鯉が竜門の滝を登ると竜となつて天をかける」という中国の故事があります。

「登竜門」という「男児の成長と出世を願う」言葉になりました。もともと鯉は、清流だけでなく、池でも沼でも生きられる生命力の強い魚です。

この中国の伝説から、鯉のぼりは環境の良し悪しにかかわらず、立派に成長し、立身出世するように願って飾られるようになったとも言われています。

江戸時代、武家に男の子ができたら玄関の前に馬印やのぼりを立てて祝う風習がありました。それが一般にも広まったのぼりを立てるようになり、庶民によって鯉のぼりが考案されました。鯉のぼりは町人の家庭でよくあげられるようになったと言われています。

登竜門の話を「鯉のぼり」という形で、青空を泳がせるという発想は、世界に類を見ない日本人独特の感性です。